

原川城の場・坂尻遺跡

(市道北原川村松西線道路改良工事に伴う調査報告書)



例 言

1. 本書は、昭和63年度・平成元年度に、綾井市国本字約場384-1他で実施した「市道村松西北原川線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」の原川域的場・坂尻遺跡発掘及び現地立会調査の報告書である。
2. 今回の調査は、綾井市役所土木課維持係よりの依頼で、道路改良部分の原川域的場・坂尻遺跡の両遺跡内の調査を実施した。
3. 本調査は、永井義博（綾井市教育委員会主任学芸員）が担当した。
4. 本報告書の執筆・編集も永井義博が行った。
5. 今回の発掘調査は、綾井市役所土木課維持係及びこの仕事を請け負った西郷建設の全面的な協力により実施された。
6. 綾井市教育委員会での事務は、社会教育課文化振興係が担当した。
7. 調査資料は、すべて綾井市教育委員会が保管している。

第1章 調査に至る経過

桜井市教育委員会は、昭和63年5月23日より1ヶ月間の予定の国庫補助事業として、桜井市本体内で坂尻遺跡の発掘調査を実施していたところ、隣接する市道北原川村松西線の原川城跡内で道路改良工事が計画されていることが判明した。そこで、桜井市土木課維持係と協議を重ね、工事と並行して発掘調査を実施することとなった。この改良工事は翌年度は、原川城跡の両側に位置する坂尻遺跡内でも実施するため、発掘・立会調査を実施することとした。

昭和63年度の原川城跡の発掘調査は、国庫補助事業の坂尻遺跡の発掘調査を一時中止して、6月6日から8月までの3日間で実施した。天候にも恵まれ順調な調査であった。平成元年度の原川城跡の一部と、坂尻遺跡内の発掘・立会調査は、6月21日から8月22日までの10日間実施した。ここでは、当初に発掘調査を予定していた原川城跡部分が教育委員会に連絡なしで工事が始まってしまい、発掘調査ができなかったことが残念であった。しかし、それ以降の坂尻遺跡地内は随時、教育委員会に連絡が入り円滑に立会調査を実施できた。立会調査は、国道一号線の接続部分まで行われた。この市道は交通量が多く、また大型車両が通行する割合が多く、調査中に周辺で人身事故を含め数件の交通事故があった危険な地域であった。



▲ 原川城跡の堀付近航空写真 (矢印が調査区)

工事の工程に合わせて随時実施した。その後、資料整理。

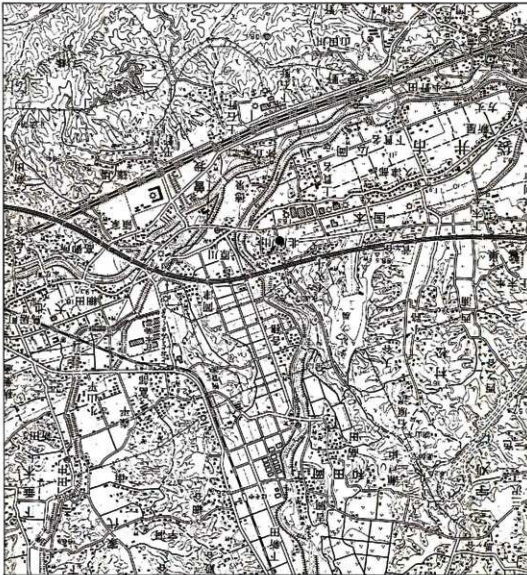
平面調査を予定していた地区を工事により破壊されてしまったため、水路部分の立会調査を

(平成元年度)

- 6月9日 器材の撤収。調査完了。
 - 6月8日 遺構実測、遺構写真。
 - 6月7日 精査を行い遺構確認。遺構を掘り上げる。P11、溝跡の検出。
 - 6月6日 ユンボで調査予定地の表土を除去。その後、作業員によって遺物を含む層を掘り下げる。覆土されている場所が多い。
- (昭和63年)

第2章 調査の経過

▲ 遺跡の位置 (1:50,000)



第3章 調査方法

今回の発掘は、市道の改良工事に

伴う調査のため、南北に細長く、ま

た三角形の調整区など発掘調査を行

うにはあまり条件が良いとは言えな

い場所であった。しかし、土木課維

持係、西郷建設の協力により比較的

スムーズに実施することができた。

まず、対象地をA～Gの7つのト

レンチに分けた。このうち、昭和63

年度にA・B・Cを調査し、平成元

年度にD・E・F・Gを実施した。

実測基準は、道路工事用のセノカー

を援用し、レベルも工事用のベンチ

マークを使用した。

調査方法は、基本的に重機により

表土を除去した後、作業員により遺

構の精査を行った。道路脇の発掘と

いうことで安全には、特に気を配り

実施した。重機による掘削ですでに

遺品等で遺構が失われていた場合は

土層観察と写真撮影を実施後に工事

にとりかかった。

現地の実測図作成は、20分の1を

基本として、全体図は100分の1で

作成した。遺物が集中するなどの特

殊な遺構は検出されていないので10

分の1の詳細図は作成しなかった。

写真撮影は7サレベソックス6×

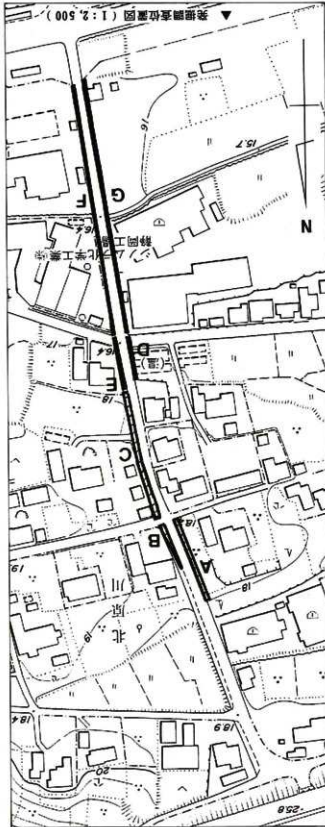
7とニコンFE2台で対応した。南

北に細長い調査区のため原川城跡に

伴う遺構は、やや検出が難しい状態

であった。Cトレンチの古墳時代の

溝跡が注目される。



第4章 調査体制

●調査計画 焼井市役所 土木課維持係

●調査指導 静岡県教育委員会 文化課

●調査主体 焼井市教育委員会

教 育 長 渡井通男

社会教育課長 岩崎 保

文化振興係長 小粥保夫

主任学芸員 吉岡仲夫

主任学芸員 永井義博 (調査担当者)

主 事 建部千代子

学 芸 員 松井一明

●調査参加者

三浦久雄 海野昭平 岩崎良男 山崎莊一

諸井 栄 早川里美 寺田炬江 早川保子

博松光子 山下悦子 船越ミ子

▲発掘調査風景



原川城跡、坂尻遺跡は、桜井市街から国道1号線を約5km東進した掛川市と境を接する桜井市国土地内に位置している。これは、桜井市村松にある名刹医王山油山寺一帯に広がる可懸・油山丘陵の南東端にあたる。この丘陵は、小笠原層とその下に不整合で横たわる曾我園群により形成されている。遺跡の東側には、原野谷川が吉岡の丘陵に沿って南下し大きく西に流れを変えるところである。この変換点あたりは掛川市から流れてくる逆川、垂木川等の合流点である。この坂尻遺跡の周辺を流れる原野谷川には蛇行流路の跡が残っている。蛇行流路の発達には周辺の川が昔段はおだやかな流れであるが、大雨が降ると河川が氾濫を起し、次々と流

第5章 地理的・歴史的環境

▲ Cトレンチ完掘写真(北より)

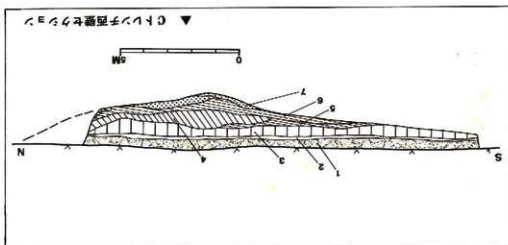


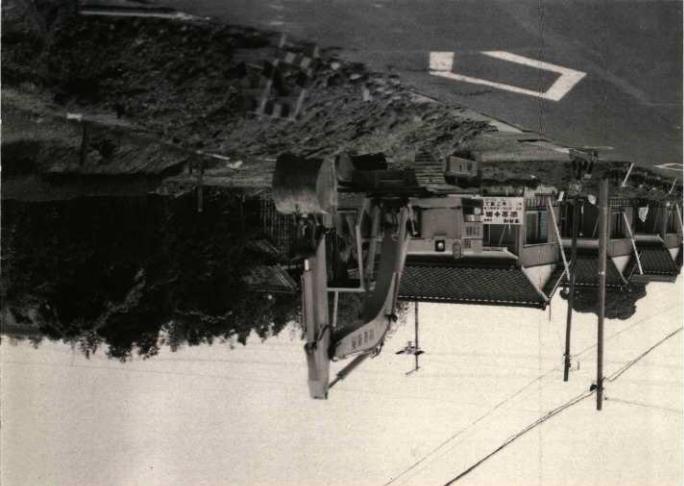


▲ Cトレンチ完掘状況

今回の調査で遺構確認のできたトレンチは主にCトレンチである。まず、Aトレンチは茶園の部分に設定されたトレンチであるがすでに地下1mほどまで改竄され遺構・遺物は検出されなかった。Bトレンチはちょうど民家の生け垣の部分にあたり木の根により大きく覆乱されており遺構・遺物とも検出されなかった。Cトレンチは、6ページに北側の平面図を、7ページに南側の溝状遺構の断面図を示したとおりの遺構検出状況である。しかし、なにぶんにも調査

第6章 遺構の概要





▲ Gトレンチ表土除去作業

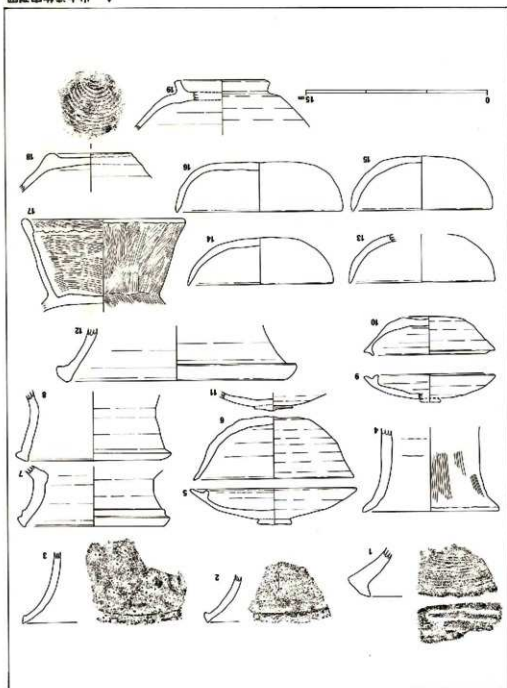
小破片も出土している。金属製品、木製品の出土はなかった。
 Cトレンチ北側の表土下の出土である。ここに図化できなかったが胃磁器の小破片と染付けの
 Cトレンチ南側の包含室内の出土である。18は山米碗の破片、19は陶器片である。これらは
 13～17は古墳時代後期の土器器片である。13～16は坏身、17は付付箋の台部である。これらは
 6・10は坏身、7・8・12は甕破片である。これらは、Cトレンチ北側の土境内の出土である。
 器片である。その多くがCトレンチで検出された遺構からの出土である。5・9・11は坏蓋、
 表面の文様の確認も難しいものが多かった。5～12は古墳時代後期～奈良時代にかけての須恵
 9ページの遺物表図のうち1～4は弥生時代中期の土器破片である。全体に摩耗が激しく
 世、近代とグリエリイシヨに京んでいる。

今回の調査で出土した遺物は、弥生時代中期・後期、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近

第7章 遺物の概要

レンチ・Gトレンチは立会調査である。
 い。Eトレンチは、調査することなく工事が開始されてしまい、なんの記録もたない。Fト
 とおり古墳時代の遺構である。Dトレンチは立会調査であったが遺構・遺物は検出されてい
 部といえるだろう。Cトレンチの南側は大きな溝状遺構を検出したが西壁セクシヨンで示した
 チの北側は弥生時代中期～戦国時代までの広い幅の土器が出土しておりいわゆる複合遺跡の一
 範囲が狭いため各遺構の性格をつかむところまでいっていない。出土遺物からみるとCトレン

▲ 出土文物測圖

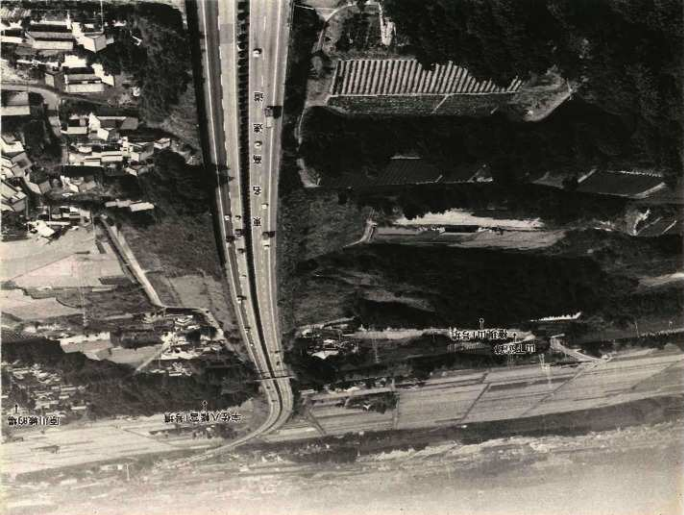


第8章 まとめにかえて

右の11ページの航空写真は1989年に撮影したもので、東名高速道路により南北に分断され
 ってしまったが、坂東遺跡を初め神橋平野に面した遺跡の成立、継続に係わるパツクボー
 ンとなっている地域である。写真のなかで、まず山下遺跡は弥生時代中期の方形周溝墓群等を
 確認した江藤上の遺跡であるが、この北側のホルン場造成にあたっては縄文時代～弥生時代に
 かけての遺構・遺物が検出されており、今回の発掘調査で出した弥生時代中期の遺物と大き
 な関連を持っている。次に古墳として榛原山古墳・宇佐八幡古墳そして石ノ形古墳があり、ま
 たこの奥にはサケ谷横穴墓があり阪上遺跡の古墳時代の遺構・遺物と大きな関連を持つと思わ
 れる。そのほかいくつかの門塚がこの静岡カントリーゴルフコースの中に潜えてしまったと証言
 されている。

さて、今回の発掘調査の主眼となった原川城跡（的場地区）は、文亀年間（1501～05）に
 原川大和守が築城した城で、当時の掛川城にいた今川氏真は、西の出城として三河の徳川家康
 に備えた。しかし、永禄12年（1569）家康は掛川城を攻め、同年5月、氏真は家康に降伏し
 掛家渡（南澤町）より伊豆戸倉に移った。これに伴い、原川氏はこゝ原川城を離れて城東部高
 瀬村に隠棲することになった。この原川城に関する記録は少なく、古文書等にその名が登場す
 ることはまれで「城」と呼ばれてはいないが、実際には最前線の砦のような性格を示すものと思
 われる。そのため、原川城の性格を明らかにするためにこのように城内に鎮る小字名も大切
 な手がかりとなってくる。城跡内で東西に通じる道を「中道」と呼び、今回調査したトレン
 チ付近の西郷博士宅を地元の人たちが「的場」と呼ぶ。そのほか城内では「奥屋敷（海野駒
 雄氏）」「細光」「向屋敷」「殿屋敷」「銀治屋敷」「住吉」「石ノ形（海野孝子氏）」「別所」
 「口」」「御林（足立義男氏）」「隠居（海野昭平氏）」「金光寺（増井益五郎氏）」「郷倉」など
 がある。原川城内の発掘調査は、宅地造成に伴い小規模ながら実施されている。その結果、土
 器や井戸、塀に囲まれた大きな堀立柱建物跡が検出されている。また、1989年には国庫補助事
 業として住宅関連で堀跡部分の発掘調査が行われたりしている。今回の調査結果からも言える
 ことであるが、原川城跡は遺跡としての立地条件の良さから、どこを掘っても縄文時代、弥生
 時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世、近代などあらゆる時代の遺構・遺物を検出す
 る可能性を持っている。それが、何層もの文化層となって堆積している場合と、平面で複雑に
 遺構が重複している場合があり遺構・遺物の検出を難しいものになっている。

総合的な発掘調査を実施している久野城跡に比べて、原川城は発掘調査も断片的なものが多
 くその一部を解明するきっかけさえつかめていない。今後の調査例の増加により新たな資料の
 出現を待ちたい。



▲ 原川城跡の北側地域

(参考文献・引用文献)

- 1981 『静岡県の中世城館跡』 静岡県教育委員会
- 1985 『坂尻遺跡―国1バイパス関連―』 建設省中部地方建設局ほか
- 1986 『坂尻遺跡』 シノムラ化学静岡工場 袋井市教育委員会
- 1988 『坂尻遺跡』 小松フュークリフト㈱ 袋井市教育委員会
- 1989 『袋井市原川城跡・坂尻遺跡』 袋井市教育委員会

市道北原川村松西線道路
改良工事に伴う調査報告書

原川城跡・坂尻遺跡

1990年3月30日

編集 静岡県袋井市教育委員会

袋井市新屋一丁目1番地の1

TEL 0538 (43) 2111

印刷 (有) オウスイエム・エス・シー

袋井市久能 1977 の 7

TEL 0538 (42) 3164